



Title	月刊DRF 第26号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2012-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73511
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_26.pdf



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第26号

No. 26 March, 2012

【特集1】 平成23年度DRF活動報告

【特集2】 SPARC Japan セミナー参加記

<トピック> DRF機関リポジトリ構築・運用状況アンケート報告

特集1 平成23年度DRF活動報告

●企画WG

▼**新任担当者研修**／昨年度までのNII学術ポータル研修の後継となる機関リポジトリ新任担当者向けの研修を初めて開催しました。NII会場は申込開始当日に定員がいっぱいになるという大盛況で、追加開催を行いました。3回行った研修では、大学・研究機関を含む84機関から90名の参加者があり、1日半の日程でオープンアクセスや機関リポジトリに関する講義、著作権や登録の実習などを行いました。(9月～11月)

▼**中堅担当者研修**／DRF初の試みとなる中堅担当者向けの研修を開催し、全国各地から22名の参加がありました。機関リポジトリだけでなく、学術コミュニケーションに関する諸課題や背景知識についての講義やグループ討議を行いました。答えが無い様な難しい問題について、活発に討議する受講生の姿が印象的でした。(10月)

▼**全国ワークショップ**／「学術へのオープンアクセスは大学図書館に何を免じ何を任ずるのか」というテーマのもと、大学における機関リポジトリの事例報告、ジャパンリンクセンター(JaLC)や大学図書館コンソーシアム(JUSTICE)についての話題提供、機関Green路線とGold路線との関わり、それによる学術コミュニケーションの変化などの議論を行いました。(11月)

▼**講師派遣**／各機関などで行われるワークショップや研修会などへの講師派遣を行いました。各機関や団体が主催する7つのワークショップおよび講演会に11名の講師を派遣しました。(10月～1月)

▼**月刊DRFの発行**／DRFの広報誌「月刊DRF」の編集・発行を行い、機関リポジトリやオープンアクセスについての最新情報、特集記事など幅広い話題を提供しました。

●国際連携WG

▼**RSP及びUKCoRRとの友好関係樹立**／1月19日に、英国のリポジトリサポートプロジェクト(RSP)の代表者をお招きし、双方の活動について情報交換を行いました。RSPは、英国におけるリポジトリ運営のための人材養成を目的として研修事業等を展開している組織です。会合では、双方ともに非常に似通った課題を持ち、また非常に似通った手法で活動を行っていることがわかりました。一方で、互いに、相手にはない独自のアイデアを実施していることもわかりました。3月1日に、今後の協力関係についての申合せを取り交わしました。申合せには、英国でRSPと緊密な関係にあるリポジトリ担当者コミュニティである、英国研究リポジトリ委員会(UKCoRR)も加わってくれることになりました。情報共有を図りたいと思います。みなさまからの積極的な事例公開をよろしくお願いいたします。両国で互いに新鮮なアイデアを取り入れていけるようにしましょう！

▼**国際会議での発表・情報交換**／著者識別子に関する調査研究開発をすすめている金沢大学から内島、他による「Enhanced discovery and reuse of open access contents through author Identifiers: A case study in Japan」を第9回ベルリン宣言記念オープンアクセス会議にポスター出展しました。(11月) http://www.berlin9.org/bm~doc/berlin9_poster_kanazawa_university.pdf

▼**海外情勢の話題提供**／WG及び参加機関有志により、海外のメーリングリスト、ブログ記事などの大意を日本語でDRF公開メーリングリストに紹介する活動をすすめました。米国で審議中の研究著作法案(RWA)や、Timothy Gowersによる「The Cost of Knowledge」運動、リチャード・ポインダー氏の学術コミュニケーション関係者への最新インタビューなど、ホットな話題を日本語でキャッチできるようつとめました。それから、古典も。スティーブン・ハーナッドの転覆提案も月刊DRF上で紹介しました。

▼ほか、従前通り、COARへの参画、オープンアクセスウィークの活動展開促進をすすめたほか、2月29日開催のSPARC Japan セミナーに企画協力し、メガジャーナルの急成長をはじめとしたオープンアクセス出版の動向紹介につとめました。

●技術サポートWG

▼**開発**／DRF技術ワークショップ:DRF-tech karuizawa 2011を12月に開催しました。本ワークショップでは、DRFメーリングリストで要望のあったOAI-PMHに対応していない学術情報データベースとの連携をメインテーマとして取り組み、Junii2を活用した汎用的なデータ提供ツールを作成しました。本ツールを活用することで、RePEc(経済学分野のデータベース)、DOAJ(オープンアクセス学術雑誌のデータベース)と連携する際に求められる、論文データを簡単に作成することが可能となります。また、昨年度作成・公開したマニュアル類の検証やリポジトリソフトウェアに追加された機能の試用レポートの作成を行いました。詳細についてはDRF Wikiサイトを参照してください。 <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Karuizawa2011>

▼**その他**／DSpace Community Advisory Teamのアンケート調査に対して、日本の状況と要望を回答しました。概略は以下の通りです。①日本では多くの機関がDSpaceを利用。②日本ではJunii2フォーマットが標準化しており、DSpace標準でのJunii2サポートを期待。(10月)

▼**次年度に向けて**／今年度発足したJaLCは、学術機関と連携し、電子ジャーナルの全文所在情報の一元管理と、その安定的提供のために国内の電子ジャーナルへのDOI(Digital Object Identifier)付与を進める方針を示しています。機関リポジトリのコンテンツもこのターゲットとして考えられていますので、JaLCと機関リポジトリの関係について、技術的課題の有無も含めた検討を次年度に向けて開始しています。(2月)

特集2 SPARC Japan セミナー参加記

第3回 SPARC Japan セミナー 2011 「学術情報流通の新たな展開 - 研究者・学会とオープンアクセス - 」が、平成24年1月31日に岡山大学で開催され、国立情報学研究所、学会、研究者とそれぞれの立場からの講演がありました。西日本を中心とした各地から、図書館関係者、研究者など44名の方が参加されました。

レポーター： 中山 千佳子 (DRF集会企画・人材養成サブワーキンググループ 岡山大学)

「NIIによる学術情報流通基盤の構築について：オープンアクセス関連の事業・サービスを中心に」 森 いづみ 氏 (国立情報学研究所 専門員)

日本の研究者による、国内外ジャーナルへの論文発表動向を背景として、NIIのオープンアクセス関連事業・サービス (JAIRO Cloud等の機関リポジトリ構築支援・促進方策、SPARC Japanの取組・課題)、JUSTICEとの連携等についてお話しされました。本セミナー最初の講演ということで、日本における動向を分かりやすく説明されました。

「研究者のアウトリーチ活動としてのセルフアーカイビング」 轟 眞市 氏 (物質・材料研究機構 主幹研究員)

著者最終稿であってもリポジトリに公開し、それが発見されやすい工夫をこらせば、専門分野にとらわれず幅広い読者からアクセスがあることを、実例を踏まえて紹介されました。「ブログを基にした実験ノート」という興味を引きやすい題材を扱った論文であったり、実験ビデオ映像をYouTubeに公開してそこから論文へのリンクに誘導するといった、敷居の低いコンテンツからの利用の広まり方が興味深かったです。「研究者は研究成果をすべてOAにしたいのか、クローズドにしておきたいものもあるのか」という質問に対しては、「様々な意見があると思うが、自分は、特許等に関わるものを除けばクローズドにしておきたいものはあまりない」と回答されました。研究者がセルフアーカイビングをする際の負担を少なくし、かつその反響を即座に示せば、自発的なデポジットが促進できるという結論は、励みにもなり、今後どう環境づくりをしていくべきかを考えさせられる講演でした。(轟先生の論文が「情報管理」の5月号に掲載予定だそうですので、そちらを拝見するのも楽しみです。)



若い頃から、LinuxやRubyなどフリーソフトによる恩恵を受けてきた。その恩を返すこともあって、自らが書いた論文を可能な限りオープンアクセスにしてきた。その内の2つの論文が、発表後3年以上経った後でも1,500ダウンロードを記録した。今回はその論文がどのように利用されたかの分析を紹介する。

広く利用されたきっかけとしては、ブログで紹介されたこと、セルフアーカイブのサイトにYouTube映像を組み込んでいること、掲示板での雑談に引用されたこと等がある。

著者最終稿であっても、公開しておけば求める人は見つけてくれる。また、映像などの敷居の低い素材を公開して新たな関心を呼び込む手もある。こうした反響がすぐ分かるシステムがあれば、アーカイブが習慣になる。

「学会と機関リポジトリ - 情報発信は強化できるか -」 永井 裕子 氏 (社団法人日本動物学会 事務局長)

日本動物学会の学会誌「Zoological Science」のこれまでの経緯、機関リポジトリ登録論文へのアクセス分析結果とBioOne サイトでの利用状況との違い、そしてその論文の引用のされ方等についてお話しされました。機関リポジトリ登録論文は研究者以外の一般の人々の利用が多いこと、OA論文へのアクセスのログ解析こそ重要ということが印象的でした。参加された岡山大学の研究者が「リポジトリは知ってはいたが、どうすればよいか分からなかった。今回講演を聴いて自分の論文をリポジトリで公開したいと思った。」と発言され、リポジトリ担当者としてPR不足を反省するとともに、どのように使われているのか、広く発信するために何が有効かといった点が重要であることを改めて感じました。

[参考]

佐藤翔, 永井裕子, 古賀崇, 三隅健一, 逸村裕: 機関リポジトリへの登録が論文の被引用数と電子ジャーナルアクセス数に与える影響, 情報知識学会誌 Vol.21 No.3 pp. 383-402

http://www.jstage.jst.go.jp/article/jsik/21/3/21_383/article/-char/ja/

それぞれの立場からの講演と、意見交換があり大変有意義なセミナーだったと思います。参加された岡山大学の研究者にはセミナー後連絡を取り、リポジトリでの研究成果の公開を進めています。

最後にこの場を借りて、関係者の皆様にお礼申し上げます。
中山 千佳子 (岡山大学)



当日の発表資料はこちらから: <http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2011/20120131.html>

平成24年2月10日(金) 富山大学黒田記念講堂会議室にて第4回 SPARC Japan セミナー 2011 「学術情報流通の未来を切り開く - 電子ジャーナルの危機とオープンアクセス - 」が開催されました。大雪にもかかわらず、約50名の参加があり大盛況でした。

レポーター： 守本 瞬 (DRF企画ワーキンググループ 金沢大学)

NIIは、より広く学術情報を流通させるためにはどうするかを考えている。CSI事業 + JAIRO Cloud によって、博士課程のある大学は機関リポジトリを持つようにしたい。(400大学以上)

SPARC Japanの今後の展開としては、軸足を学会から大学へシフトすることを考えている。学会員はすなわち大学教員だから。また、国際連携や一層の広報活動を推進したい。

NIIと大学の協力で、セルフアーカイブ (CSI)、ゴールドOA (SPARC)、雑誌購読 (JUSTICE) の三位一体となった活動を続けたい。

「ビッグディールからの脱却の試み - 窮途末路の図書館の明日は」 谷藤 幹子 氏 (物質・材料研究機構 科学情報室長)

物質・材料研究機構では予算が少なく、無い袖は振れない。購読ジャーナルの最適化をはかるため、幾つかの経費削減策を行った。オンライン版への完全移行、学会誌は買わない (会員になることで読める)、購読根拠の明示、IFが高いだけでは買わない、論文を借りるシステムの導入 (deepdyve) など。この決定のため、細かいログ調査事例も行った。バックファイルの利用率は非常に低いことなどが分かった。

とにかく、研究者自身に「論文は無料でないこと」を理解して貰う必要がある。そもそもそのジャーナルは本当に必要ですか？

将来について考えると、著者としての研究者と読者としての研究者が居る限り、学術雑誌は無くならないし、たぶん学術誌出版ビジネスも無くならない。

研究者に提案：論文単位で買いませんか？ 外部資金で買いませんか？

出版社に提案：カスタマイズパッケージを！
個人・グループ単位での価格設定を！

図書館に提案：
購読モデルの最適化を。
どのような形態で買うのかを考える。



<ディスカッション>

ディスカッションでは、「自分でもセルフアーカイブできますか？」と会場に質問がありました。それに対して、教員A(生物学)「めんどくさい。が何らかの効果はあると思っている」、教員B(数学)「数学分野では論文の寿命が長いので、多くの方がアーカイブしている。プレプリントの流通も普通。ArXivがあるが玉石混交で、査読機関を作る話もある」、教員C(物理?)「OAは読者層を広げるなど感じた」などの意見がありました。

また、富山大の村田課長から「なぜEJは値上がりを続けるのか」との話題提起があり、講師からは、轟氏「論文の数が減らない限りコストは下がらない。中・印など。日本も論文数で評価されるので書かないといけない」、谷藤氏「物の価値にカネを払うのは当たり前。いくらにするかは需給の問題」、森氏「コストを下げるために著作権の入札をする方法を模索中 - SCOAP3」、永井氏「広告費が落ちている。ただ、広告費が足りないからといってなぜ図書館が払うのか」「やっぱり株主へ還元するため、儲けは取るうとする」との意見がありました。

最後にパネリストから研究者へ一言！

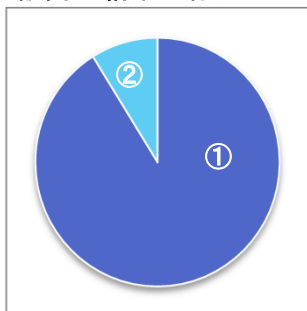
「論文の本数で勝負しているのは良いのか？ 中身を読んで評価しないのか？ インパクトファクターさえ高ければそれでいいのか？」

当日の発表資料はこちらから: <http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2011/20120210.html>

DRF機関リポジトリ構築・運用状況アンケート報告

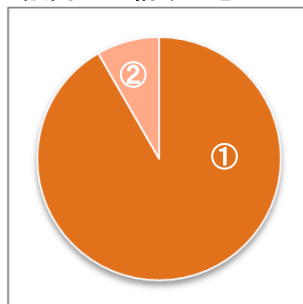
DRFでは、参加機関の実態を調査・把握し、今後の研修等の活動の基礎資料とするため、DRF機関リポジトリ構築・運用状況アンケートを今年度実施し、127機関中79機関からご回答をいただきました(回答率62.2%)。お忙しいところご協力いただいた参加機関の皆さま、ありがとうございました。以下に「アンケート その2」の現時点の集計結果を抜粋してお知らせします。

設問1 構築の有無について



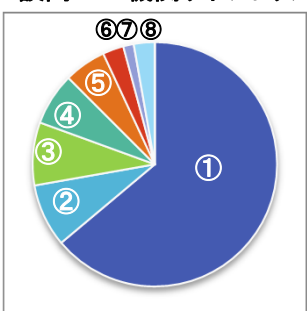
回答をいただいたDRF参加機関で①「構築している」機関は72機関(91.1%)、②「構築をする方向で検討している」機関は7機関(8.9%)でした。

設問2-1 構築形態について



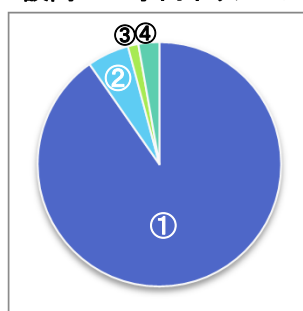
機関リポジトリを構築している72機関のうち、①「単独で構築している」機関が66機関(92%)、②「複数機関と共同で構築している」機関が6機関(8%)でした。

設問2-6 機関リポジトリシステムについて



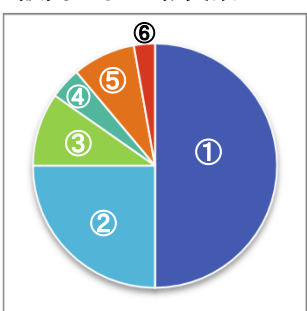
72機関中最も多く使われているシステムは① DSpace (46)で半数以上の機関が使用しています。以下、② XooNips(6)、③ NALIS-R (6)、④ InfoLIB-DBR (5)、⑤ Earms (4)、⑥ E-repository (2)、⑦ WEKO (1)、⑧ その他(2)でした。EPrintsを使用している機関はありませんでした。()内は回答機関数。

設問2-7 学内ポリシーについて



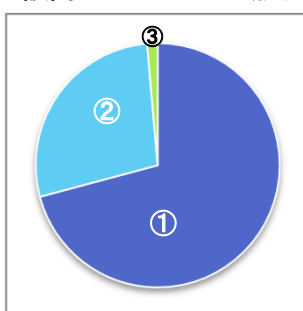
学内ポリシーを①「策定済み」の機関は65機関(90%)、②「策定予定」の機関が4機関(6%)、③「現在特に予定なし」の機関が1機関(1%)、④「未定・不明」の機関が2機関(3%)でした。

設問3 担当職員数について



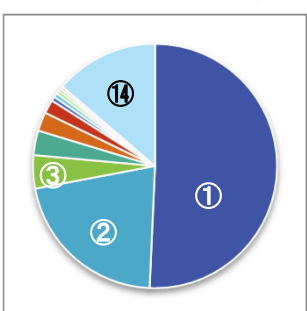
担当職員数が1人以下の機関が最も多く36機関(50%)①でした。以下、②1.1~2人が18機関、③2.1~3人が7機関、④3.1~5人が3機関、⑤5.1人以上が6機関、⑥未回答・不明が2機関でした。平均すると、1機関あたり約2.8人になります。また、アルバイトや業務委託をしている機関は12機関ありました。

設問4 コンテンツ重点収集方針、重点コンテンツについて



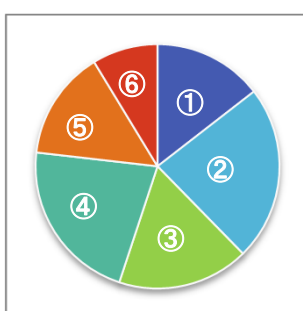
コンテンツ重点収集方針について、①「有」が51機関(約71%)、②「無」が20機関、③「不明」1機関でした。重点的コンテンツには、「学術雑誌論文」(42)、「学位論文」(38)、「紀要論文」(38)、「研究報告書」(18)が多く上げられていました。

設問5 コンテンツ種類別登録件数(平成22年度)



平成22年度コンテンツ登録件数を種類別に集計。合計412,119件の内訳は次のとおりです。①紀要論文208,959件(51%)、②学術雑誌論文87,871件(21%)、③学位論文18,156件(4%)、④データ・データベース13,442件、⑤研究報告書10,302件、⑥会議発表論文7,457件、⑦一般雑誌記事2,382件、⑧テクニカルレポート2,316件、⑨会議発表資料1,873件、⑩図書1,407件、⑪教材1,285件、⑫プレプリント193件、⑬ソフトウェア0件、⑭その他56,476件

設問7 機関リポジトリ関連経費(平成22年度)について



機関リポジトリ関連経費の平均額は153.6万円、最高額は950万円、最小額は0円でした。経費額ごとの分布では、①0~10万円未満が10機関、②10~50万円未満が16機関、③50~100万円未満が12機関、④100~200万円未満が15機関、⑤200~500万円未満が10機関、⑥500~1000万円未満が6機関でした。

次号
予告

【特集】 DRF研修等年間スケジュール

編集後記: 記事をお送りいただいた皆さまありがとうございました。おかげさまで何とかここまでこぎつけられました。(un)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkanrdf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第26号 平成24年3月1日発行 デジタルリポジトリ連合